

## 副館長・館長在任当時の思い出と今後への期待

——『図書館紀要』創刊五〇周年によせて——

野 口 洋 二

図書館は新館が開館して早くも十八年目を迎え、ますますその内容を充実させつつある。また、一九五九年に当時の館長であった大野實雄先生が創刊されたこの『図書館紀要』も、今年に創刊五〇周年を迎えるという。誠に慶賀すべきことであり、これまで寄稿されてきた諸先生や編集に携わってこられた館員諸兄弟姉妹に対して、心からの敬意の気持ちを表したいと思う。

ところでわたしは、一九八七年一月に副館長として図書館に勤めるようになった。今から二〇年以上も前のことである。就任した当時は、旧図書館（二号館）にあった洋書係の部屋の窓際に机を構え、もっぱら洋書の蔵書構成や選書の仕事に携わっていた。ついで、一九九〇年九月から第十四代の館長として図書館長を四年間勤め、さらに、図書館行政を担当する理事を二期八年のあいだ（一九九四年から二〇〇二年一月まで）勤めた。つまり、十六年ものあいだ、図書館に親しく係わっていたことになる。しかも、わたしが図書館長になった年には、新中央図書館が竣工し、翌年にかけて移転が行われ、その四月には、新図書館をふくむ「総合学術情報センター」の開館式が盛大に行われた。こうしてわたしは、幸運にも、二十一世紀にむけた早稲田大学の新しいシンボルの建設と開館という決定的瞬間に立ち会うことができたのである。

新中央図書館をふくむ総合学術情報センターの建設は、創立百周年記念事業の目玉として早くから計画されていた。図書館でも、一九八二年に就任した第十二代館長濱田泰三先生のもとで、全館員が参加する三十一にもなるワーキング・グループによって建設計画の骨子が練られ、ついで一九八七年からは、第十三代館長である奥島孝康先生のもとで新館の運営と設備を中心とする実施計画を検討する八つのワーキング・グループと「総合学術情報センター開設準備室」が設置されて、着々と準備が進められてきた。

しかし、建設にいたる道はかならずしも平坦であったとは言いがたい。建設が予定された安部球場は伝統ある野球部の聖地であったので、決定されるには多くの困難を伴ったからである。しかも、建設が決定され着工した後も、弥生時代後期をふくむ遺跡が発見されて、学術調査をするなどして着工が遅れ、建設は計画よりも一年も遅れて開始された。

新館完成後の最大の問題の一つは、移転であった。新館が竣工した一九九〇年一〇月から翌年の三月にかけて、机や書架が設置・移転されるとともに、本庄別置の図書を皮切りに、本館と分室の図書・資料が新館に運びこまれた。これらを所定の位置に収める仕事はなかなか大変な作業であった。しかも、開館式前日には活動家の学生たちが乱入し、いたる所に落書きをして回るといふ事件が起こり、夜を徹してこれを全員で消して回るといふハプニングも生じた。しかしとにかく、移動や開館のための整備という大変な作業も、館員諸兄妹の一致した努力と献身的な働きで無事見事に乗り切ることができたのである。

こうして混乱のうちに一九九一年開館を迎えたが、開館一年目は、開館式や会議などで多忙を極めた。まず、開館後もない四月一二日には、海外からの招待者十二名をふくむ多数の関係者列席のもと、「総合学術情報センター」の開館式が盛大に行われた。また、同年七月末から八月にかけては、「二十一世紀と私立大学図書館」をメインテー

マに、全国から四百人近くの図書館員が参加して、私立大学図書館協会の第五十二回総会と研究会が行われ、さらに九月には、世界十七カ国四七機関から七二名が参加して、図書館の学術情報システムの根幹をなしているDOBIS / LIBISのユーザー会の年次大会が国際会議場で盛大に行われた。

この他、開館の前後にかけて行われた文学部創設百周年と「早稲田文学」創刊百周年を記念する展覧会も忘れることができない。まず、「ワセダと現代の作家たち」展が一九八九年一月から翌年二月にかけて東京、名古屋、仙台の丸善のギャラリーで開かれた。ついで一九九一年一〇月には、「早稲田と文学の一世紀」展が池袋の西武百貨店で盛大に開催され、いずれも多数の入場者があり好評であった。

このように開館や文学部の百周年などを記念する行事を無事終えることができたことはもちろん嬉しいことであったが、何よりも嬉しかったのは、新館のオープンによつて、利用者が飛躍的に増加したことである。旧図書館とは規模や利用方法が異なっているので、単純に比較することはできない。しかし、新館に移って一年目には、早くも利用者が百万人を突破し、その後も着実に増えつづけている。したがって、新館オープンを期に利用者が急激に増加したことは間違いない。

こうして新図書館は無事成功裏のうちに船出することができたのであるが、それはともかく、私の在任中に図書館の活動の基礎とも言うべき幾つかの重要な動きが新たに開始されたように思われる。なかでも、まず記しておかねばならないのは、図書館のあり方それ自体が大きく変わったことであろう。つまり、「保存」を中心とする図書館から「利用」を中心とする図書館へと変わったことである。閉架式の旧図書館にたいして、新図書館は、一部の貴重図書を除いて、図書を自由に、直接手に取ることのできる開架式を採用することによつて、これが実現された。こうしてわが図書館は、利用者と共に「開かれた」図書館となったのである。

二つ目は、本館と分館からなる図書館網の構築である。所沢図書館はわたしが副館長に就任した年の五月に開館したが、この図書館は、所沢新キャンパスにおける研究と学習の両機能を併せもつばかりでなく、中央図書館と密接な関係をもつ分館の第一号であった。その後、一九九〇年四月には理工学図書館が分館となり、一九九二年四月には戸山キャンパス内に戸山図書館が開設されて分館の一つとなった。さらに、一九九四年四月には、旧図書館（二号館）の書庫部分を改修し、西早稲田キャンパス内の各教員図書室などから移動した図書を中心に、四〇万冊を収蔵する高田早苗記念研究図書館を開館することができた。こうして、本館とこれら各キャンパス内の分館を緊密に結びつけるネットワークが完成したのである。

三つ目は、学術情報システムの構築である。わたしが副館長に就任した年には、学内の図書館をネットワークで結び、利用者に幅広い学術情報を提供するためのオンライン・システムの開発が完成し、世界有数の図書館システムである「DOBIS/LIBIS」を母体とするシステム（WINE = Waseda University Information Network）が、所沢図書館で運用を開始した。その後、このシステムは、紀伊國屋書店と共同事業で行ってきた所蔵図書目録データ入力システムの他、蔵書管理システム、情報管理システムとともに、新中央図書館をはじめ各分館に張りめぐらされることとなったのであるが、後にも述べるように、このシステムは、世界の図書館とも結ばれることとなる。

四つ目は、先進的な図書館の一つとして世界に認められたことである。世界最古の図書館の一つがアレキサンドリアの図書館であることは良く知られている。このアレキサンドリアの図書館が近年再建されたのを記念して、一九九六年に、各国を代表する十五の図書館が選ばれ、一冊の本が刊行された。それに日本を代表する図書館としてわが早稲田大学の新中央図書館が選ばれたのである。この本には、新中央図書館が、「日本の最も著名な大学の一つの中に一九九一年に建てられた、近年建てられたなかで最大の、二八、〇〇〇平方メートルに近い図書館」として詳しく

紹介されてゐる。(Nouvelles Alexandries. Les grands chantiers de bibliothèques dans le monde. Sous la direct. de M. Meiot, 1996. Edit. du Cercle de la Librairie. pp. 381ff.)

これとともに、図書館は一九九五年から、世界最大の書誌ユーティリティであるOCLC(アメリカ・オハイオ)に和書の遡及データを提供し、コンピュータを通じてWINEの国際接続を可能にすることとなった。これによって、早稲田の蔵書は世界のどこの大学図書館からも検索できるようになったことを記しておきたい。

こうして副館長・館長在任時代の記念すべき幾つかの思い出に耽っているうちに、早くも予定の枚数を越えてしまった。そこで最後に、一、三の期待を述べて結びとすることにしよう。

かつてわたしは、本誌の三十七号に「新中央図書館——回顧と展望」という小論を書いたことがある。その時今後取り組むべき課題としてあげたのは、学習図書・研究図書の充実、資料保存、つまり利用と保存をいかに両立させていくか、遡及入力 of 推進と図書館システムの整備、優秀な人材の育成とサービスの向上、館蔵資料の公開などであった。その後図書館は、わたしの館長在任中の一九九三年から、館内の総力をあげて検討を重ね、『早稲田大学図書館の課題と将来構想』(一九九五年二月刊)を纏めた。ここでもほぼ同じ課題を掲げているが、さらにこれらに加えて、対外活動の必要性、国際協力を促進すべきことを提言している。

これらの諸問題は、今後の図書館の活動においても、推進しなければならぬ重要な課題であろう。とりわけ学術情報・資料の収集と整備、国際化に伴うシステム整備、これを支える館員の育成に特に力を入れなければならないのではあるまいか。しかし、なかでも必要なことは、これまでの伝統を踏まえた資料の収集であろう。早稲田の図書館は雑学ともいえる資料を明治以来膨大に蓄積してきた。これらの資料は近年の研究動向の変化によって改めて見直さ

れつつある。限られた予算のなかで何を収集すべきか。今こそ図書館員の眼力が問われていると言うべきであり、これからの図書館の最大の課題もそこにあるのではなからうか。

(のぐち ようじ 第十四代館長・名誉教授)

副館長・館長在任当時の思い出と今後への期待